



# ロボットを用いた新しいヒューマン インタフェースの研究にむけて

【受賞タイトル】 ヒューマンロボットインタラクションに関する研究

神田 崇行 ATR 知能ロボティクス研究所

このたびは、長尾真記念特別賞をいただけることになり、たいへん光栄に思います。賞の対象となった、ヒューマンロボットインタラクションの研究は、大学院の修士課程のころに始めた研究です。当時は Sony の AIBO や Honda の ASIMO が開発されたばかりで、ロボットというと、何かハードウェア開発や制御の対象で、ましてロボットとのインタラクションとはいったい何の研究なのか、情報処理と関係するのか、まだはっきりとしていなかったのではないかと思います。私自身、その中で、何か新しいことをしようと思い、ロボットの身体を活用するためのメカニズムの研究や、小学校でのフィールド実験(下図)といった日常環境で相互作用ロボットの適用可能性を探索する研究を行ってきました。ヒューマンロボットインタラクションの研究は、立ち上がりつつある段階で、まだ日本では人とかわるロボットの研究は、ハードウェア開発やセンサ処理のアルゴリズム開発に重点が置かれているのかもしれませんが、海外ではヒューマンインタフェースとしてとらえたインタラクションの研究として注目されはじめています。これまでの研究成果は人とコンピュータとの相互作用に関する最重要誌 *Human Computer Interaction* に 2004 年に掲載されるなど評価していただいているように思います。

計算機の処理能力の向上により、情報処理の研究対象は、徐々に実世界、日常生活を対象とするものへと広がり、環境内に分散したセンサからの情報をもとに、文脈に応じて利用者に情報提供するユビキタスコンピューティングの研究などへとつながってきています。この中で、ユーザとの接点となるヒューマンインタフェースの研究も、コンピュータのスクリーンの上だけでなく、実世界を対象としたものへと広がってゆくのではないかと、そこに日本が得意とするロボット技術を活かし、擬人的な外見を持つロボットを人々とのインタフェースとして活動する可能性をさらに広げてゆけないか、と考えて研究を進めています。

(平成 21 年 4 月 8 日受付)

神田 崇行 (正会員) kanda@atr.jp

1998 年京都大学工学部情報工学科卒業。2000 年同大学院情報学研究科社会情報学専攻修士課程修了。2003 年同専攻博士課程修了。博士 (情報学)。現在、ATR 知能ロボティクス研究所上級研究員。ヒューマンロボットインタラクション、特にロボットの自律対話機構や社会的能力、人間型ロボットの身体を利用した対話に興味を持つ。



開発されたインタラクティブロボット Robovie を用いた小学校での実験風景